

第14回恵比寿映像祭、テーマおよび作家第1弾 発表



Yebizo International Festival
Art & Alternative Visions

AFTER THE SPECTACLE

www.yebizo.com

「スペクタクル後」

令和4（2022）年2月4日（金）～2月20日（日）

《15日間》月曜休館/10:00～20:00 ※最終日は18:00まで

入場無料 ※3階展示室、定員制のプログラム（上映、イベントなど）、一部のオンラインプログラムは有料
会場 | 東京都写真美術館/恵比寿ガーデンプレイス センター広場/地域連携各所ほか

TOP MUSEUM 東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

恵比寿映像祭のミッション

映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバル

恵比寿映像祭は、映像領域と芸術領域を横断する国際フェスティバルとして、平成21年（2009年2月）より開催し、今回で14回目を迎えます。文化都市東京・恵比寿から発信するフェスティバルとして、国内外の新進作家の発掘・支援を行い、国際交流と地域交流の双方を活性化させ、そして多様な表現に触れることで培われる豊かな感性を育む場として「開かれた」機会づくりを行っています。

映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展を育み、継承していくことなどを広く共有する場となることを目指しています。

第14回となる今回は、「スペクタクル後」をテーマに、19世紀後半の博覧会の歴史から現代にいたるイメージの変容まで幅広く考察していきます。

開催目的

1. 映像文化を紹介・体感する

多くの人々が多様な映像芸術表現に触れる「開かれた」機会（豊かな感性を育む機能）

2. 映像文化を創造する

新進作家の発掘・支援（作家の跳躍台としての機能）

3. 映像文化の楽しさと出会う

フェスティバルを通じて映像文化の楽しさと出会い、ジャンルや地域の垣根を越え交流

ロゴについて

映像をめぐって、ひとつではない答えをみんなで探していこう！という「恵比寿映像祭」の基本姿勢を、オープンなフレームとしてのカッコに託しました。

映像というカッコにあえて入れてみることで、はじめて見えてくるものがあるはず——

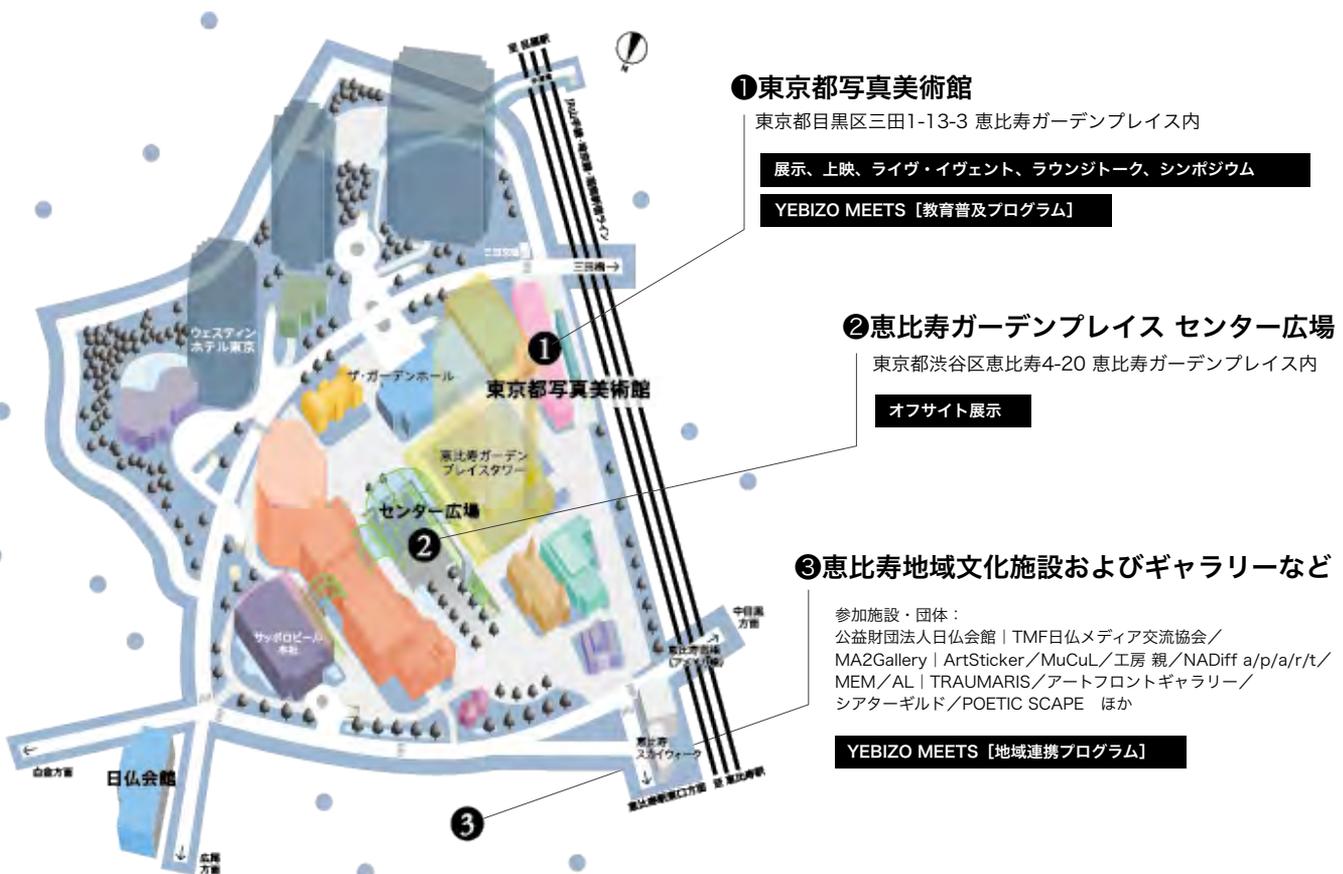
何かを限定するためではなく、いろんなものを出し入れして、よく見ためるためのカッコです。



開催概要

名称	第14回恵比寿映像祭「スペクタクル後」 Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2022 AFTER THE SPECTACLE
会期	令和4（2022）年2月4日（金）～2月20日（日）《15日間》月曜休館
時間	10:00～20:00（最終日は18:00まで）※入館は閉館の30分前まで
会場	東京都写真美術館／恵比寿ガーデンプレイスセンター広場／地域連携各所ほか
料金	入場無料 ※3階展示室、定員制のプログラム（上映、イベントなど）、一部のオンラインプログラムは有料 ※オンラインによる日時指定予約を推奨します。
主催	東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館・ アーツカウンシル東京／日本経済新聞社
共催	サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館
後援	TBS ／J-WAVE 81.3FM
協賛	サッポロビール株式会社／東京都写真美術館支援会員
公式HP	www.yebizo.com
公式SNS	Twitter: twitter.com/topmuseum/ Instagram: instagram.com/yebizo/

会場構成（予定）



第14回恵比寿映像祭 スペクタクル後

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2022 AFTER THE SPECTACLE

誰もが経験したことの無いパンデミックによって、私たちの日常は大きく変化しました。その中においても、映像はより身近なメディアとして浸透し、社会、政治、経済、文化の変化を映し出すツールのひとつになっています。とりわけ、ソーシャルメディア上のコミュニケーションによって、誰もが複層的な次元で映像体験が可能となった現代は、祝祭的イベントから、災害や戦争などの出来事まで、いかなる情報も、一大スペクタクルに見える時代です。

*

スペクタクルという言葉は、風景や光景という意味のほかに、しばしば壮大な見世物という意味で使われています。その語源、ラテン語のspectaculum（スペクタラム）には、光学的な意味と同時に、地震や火山噴火などの天変地異などが含まれていました。19世紀になると、近代国家の誕生とともに、博覧会、写真、映画のなかで、それまでの天変地異は、壮大な風景や見世物として視覚的に再現され、人々に受容されていきます。

第14回恵比寿映像祭では、「スペクタクル後」をテーマに19～20世紀にかけての博覧会や映画の歴史から現代にいたるイメージおよび映像表現について考察します。現代作家による展示や上映、イベントに加え、小原真史氏をゲスト・キュレーターに迎えた博覧会関連資料と当館コレクションによる企画や、映像作家・遠藤麻衣子氏によるオンライン映画プロジェクト、さまざまな作品との出会いを拡げる教育普及プログラムなどの新たな構成によって、映像体験の可能性を探っていきます。

*フランスの思想家のギー・ドゥポールは1967年に発表した『スペクタクルの社会』で、見世物という限られた意味ではなく、「イメージ」で構成された現代社会を把握する概念として「スペクタクル」を考察し、メディアによってイメージだけを植え付けられ、ただ受け身でいる状態をスペクタクル社会として批判しています。

第14回恵比寿映像祭ディレクター 田坂博子

「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」のコンセプト

いかなる情報も一大スペクタクルに見える時代のなかで、イメージや視覚表現を「みる／みられる」「とる／とられる」という視点から考えていきます。

「スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」をテーマに、歴史／現代性／体験という構成で、複数の展示や上映、イベント、さらに未知の作品との出会いを拡げる教育普及プログラムが加わり、恵比寿映像祭ならではの映像体験の可能性を探っていきます。

ゲスト・キュレーターの小原真史氏による博覧会関連資料と東京都写真美術館に収蔵されている貴重なコレクションを組み合わせた展示から、映像作家・遠藤麻衣子氏によるオンライン映画プロジェクトまで、映像史・視覚史・技術史の原初を詳らかにすることを出発点に、現代の映像表現を多様な作品によって提示していきます。

歴史—博覧会・映画の登場とスペクタクル

インデペンデント・キュレーターの小原真史氏をゲスト・キュレーターに迎え、小原が所蔵する約2000点の博覧会関連資料の一部と東京都写真美術館のコレクションを組み合わせて展示します。総合テーマである「スペクタクル後」を考える上で重要となる19世紀後半から20世紀を出発点に、歴史を深く掘り下げることで、あらためてイメージを取り巻く変容を考察し、現代の作家へとつなげていきます。



「ヴィサヤ族、フィリピン村（セントルイス万国博覧会）」
1904年、個人蔵

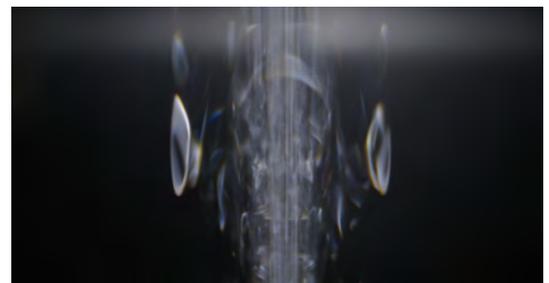
現代性—映像の「スペクタクル後」の可能性

国内・海外の現代作家による作品の展示、上映、イベントによって、最前線の映像表現の可能性を提示します。

2020年以後の世界的なパンデミックを経て、映像の受容もオフラインからオンラインへと重心が大きく変化をしてきました。

「スペクタクル後」といえる今日の状況をふまえ、気鋭の映像作家・遠藤麻衣子は新作オンライン映画を発表します。

※本プロジェクトは恵比寿映像祭では初となる新作委嘱となります。

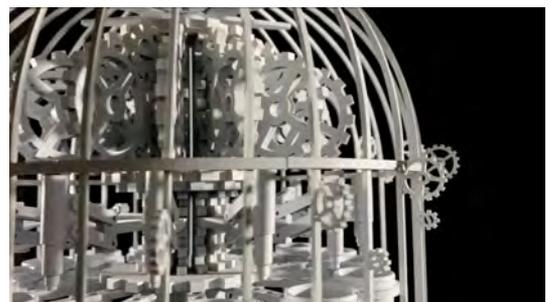


遠藤麻衣子「オンライン映画プロジェクト（仮題）」より ©Maiko Endo 2021

映像の「スペクタクル後」を体験する

—ライブパフォーマンスやYEBIZO MEETS：教育普及プログラム

スペクタクルという言葉は、「風景」や「光景」という意味のほかに、「見世物」や「ショー」という意味でも使われます。会期中、さまざまなアーティストによるトークライブやパフォーマンスを通して「スペクタクル後」を紐解いていきます。また、多様な人々が楽しめるワークショップをはじめとする教育普及プログラムの充実をはかり、未知の作品との出会い、鑑賞者の発見を促す機会を提供します。フィジカル／オンラインを組み合わせたハイブリッドな形態での開催を予定しています。



パンタグラフ《Clockwork Birdcage》2020年

ゲストキュレーター



小原真史
KOHARA Masashi

展示

キュレーター・東京工芸大学准教授。IZU PHOTO MUSEUM研究員として荒木経惟展、小島一郎展、増山たづ子展、宮崎学展などを担当。そのほか「イツ・ア・スモールワールド 帝国の祭典と人間の展示—見られる身体の歴史」展（京都伝統産業ミュージアム、2021）など。監督作品として「カメラになった男 写真家中平卓馬」（2006）がある。単・共著に『富士幻景 近代日本と富士の病』『時の宙づり 生・写真・死』『戦争と平和 〈報道写真〉が伝えたかった日本』『森の探偵 無人カメラがとらえた日本の自然』など。

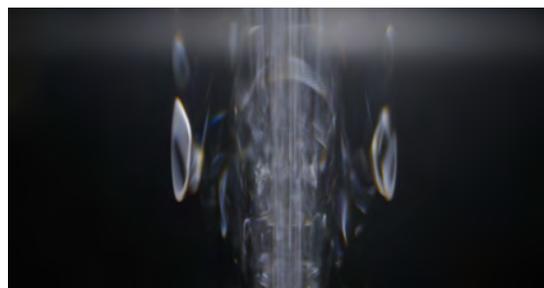
19～20世紀初頭の博覧会で、植民地をはじめとした非西洋諸国の人々を展示する、いわゆる「人間の展示」が人気を博した軌跡を膨大なイメージから考察していく。

出品予定作家 *姓のアルファベット順

遠藤麻衣子
ENDO Maiko

オンライン上映

映画監督／アーティスト。1981年ヘルシンキ生まれ。東京で育つ。2000年にニューヨークへ渡り、バイオリニストとして、オーケストラやバンドでの演奏活動、映画のサウンドトラックへの音楽提供など音楽中心の活動を展開した。2011年日米合作長編映画『KUICHISAN』で監督デビューを果たす。同作は2012年イフラヴァ国際ドキュメンタリー映画祭にてグランプリを受賞。2011年から東京を拠点に活動し、日仏合作で長編二作目となる『TECHNOLOGY』を完成させた。最新作中編『TOKYO TELEPATH 2020』が、2020年ロッテルダム国際映画祭正式出品作となる。同年第12回恵比寿映像祭に参加。2021年に初の美術作品となる映像インスタレーションを東京・東品川のTakuro Someya Contemporary Artで発表。東京で撮影予定の長編三作目を準備中。



遠藤麻衣子「オンライン映画プロジェクト（仮題）」より ©Maiko Endo 2021

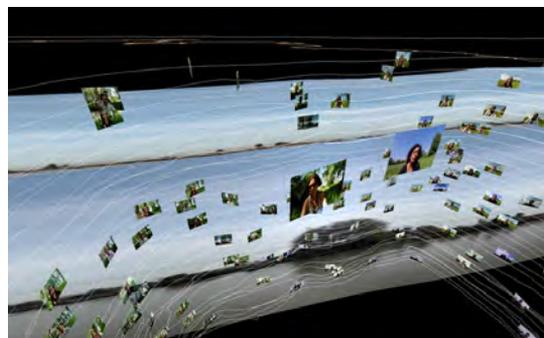
映像作家・遠藤麻衣子による、会期中配信されるオンライン映画プロジェクト。ヒトの「心」とは何なのか？作家自らが「自然(じねん)」に選択した被写体を撮影、編集することで、その「心」の在処を探求する。

藤幡正樹
FUJIHATA Masaki

展示

メディア・アーティスト。1956年東京生まれ。80年代は主にCGを扱った作品の制作、90年代はインターネットやGPSなどの先端テクノロジーに取り組む。96年には《Global Interior Project #2》でアルス・エレクトロニカのゴールデン・ニカを受賞。インタラクティブな書物をテーマにした《Beyond Pages》は1995年以降世界数十か所で展示された。1992年の《生け捕られた速度》から2012年の《Voices of Aliveness》へと続く「Field-Works」シリーズでは動画にGPSによる位置情報を付加することで仮想空間と現実空間をつなぎ、記録と記憶の新しい可能性を多数の作品群へと展開。2016年には、70年代から現在までの主要作品をARで見ることのできるアーカイブ本『anarchive #6 Masaki Fujihata』をフランスで出版。2018年の香港での《BeHere Hong Kong》に続いて、残された写真を参照しつつ、その時代の人々の営みをARを用いて現在に再現するプロジェクトの最新版《BeHere / 1942》では、1942年に起きた日系人収容所送りをテーマに取り組んでいる。

<http://www.fujihata.jp>



藤幡正樹《Voices of Aliveness》2012年 [参考画像]

動画をGPSの位置情報と共に3D空間で編集し、仮想空間と現実を結ぶ「Field-Works」シリーズに1990年代から取り組んできた藤幡正樹。《Voices of Aliveness》は、集合的な記憶を扱う、シリーズ到達点といえる。サウンドトラック監修は清水靖晃。本邦初公開となる。

1993年日本生まれ。武蔵野美術大学彫刻学科卒業、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] メディア表現専攻修了。主な個展に「差異の目」(新宿眼科画廊、2019)、「エマージェンシーズ! 036《Translucent Objects (半透明な物体)》」(NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]、2018) など。

エネルギー資源が枯渇するかもしれない時代に向けて、映像やイメージを残すことは可能なのだろうか。図像データや投影方法の名残を留める手段として、記録媒体としての石に着目し、未来のアーカイブを創造する。



平瀬ミキ《三千年後の投写術》2021年 [参考画像]
Courtesy of Shinjuku Ophthalmologist (Ganka) Gallery
contemporary art & subculture

ラウラ・リヴェラーニ & 空音央 Laura LIVERANI & SORA Neo

展示

上映

ラウラ・リヴェラーニ

ドキュメンタリー写真家。ミラノと東京を拠点に、主にコミュニティやアイデンティティに焦点を当てた社会人類学的な問題に取り組んでいる。G/Pギャラリー(東京)、イタリア文化会館(東京)、国際交流基金(シドニー)、香港フリンジクラブなどで個展を開催し、シンガポール国際写真フェスティバルなど数多くのフェスティバルに参加。日本の先住民族をテーマにした長期的な写真プロジェクト「Ainu Neno An Ainu」は、2015年にPremio Voglinoの最優秀ポートフォリオ賞を受賞し、国際的に展示・出版された。同プロジェクトは、同名のドキュメンタリー映画プロジェクトに発展し、コレクティブ「Lunch Bee House」と共同制作され、2019年に完成。現在は、ミラノ・ピッコカ大学がミラノ工科大学、RCAST/東京大学と共同で行う学際的な研究プロジェクトの普及のために、新作写真を制作している。

空音央

ニューヨークと東京を拠点に活動している映像監督、翻訳家、アーティスト。短編映画、ドキュメンタリー、PV、ファッションビデオ、コンサートフィルムなどを数多く監督、撮影、制作。最新の短編映画《THE CHICKEN》(2020)は、ロカルノ国際映画祭でプレミア上映された。アーティスト・フィルムメーカー集団「Zakkubalan」とクリエイティブ集団「Lunch Bee House」の2つのコレクティブに参加している。後者では、ドキュメンタリー映画とアートプロジェクト《AINU NENO AN AINU》(2021)の撮影と共同監督を務めた。長編映画《AINU MOSIR》(2020 / NC '21)では助監督と字幕を担当。



ラウラ・リヴェラーニ、空音央《AINU NENO AN AINU アイヌ・ネノアン・アイヌ/人間らしい人間》2018年
Courtesy of G/P Gallery

2015年からリヴェラーニと空音央が取り組んできた長期プロジェクト「AINU NENO AN AINU」。北海道平取町二風谷で現代に生きるアイヌ民族に密着し取り組んできたプロジェクトを展示、上映として実現。ドキュメンタリーの可能性を探る。

三田村光土里

MITAMURA Midori

展示

1964年愛知県生まれ。現代美術作家。さまざまな素材を組み合わせた空間を「人が足を踏み入れられるドラマ」に見立て、個人的な心象風景の物語を表現している。近年の主な展覧会に「アッセンブリッジ・ナゴヤ2020」（旧・名古屋税関港寮ほか、2020年）、個展「If not here, then I'm somewhere else ここにいないなら、どこかにいる」（Galería Manuel Ojeda、2018年）、「あいちトリエンナーレ2016」（愛知芸術文化センター、2016年）、「ここに棲むー地域社会へのまなざし」（アーツ前橋、2015年）、「虹の彼方」（府中市美術館、2012年）、個展「Art & Breakfast Melbourne」（モナシュ大学美術館、2011年）、「クワイエット・アテンションズ 彼女からの出発」（水戸芸術館、2011年）など。



三田村光土里《〈Till We Meet Again また会うために、わたしはつくるう〉のためのサウンド・インスタレーション〉2020年【参考画像】

写真、映像、音楽、言語や日用品などで、個人的心象風景を、誰もが共有できるような物語空間のインスタレーションとして実現してきた三田村。「アッセンブリッジ・ナゴヤ2020」で発表したインスタレーション《Till We Meet Again また会うために、わたしはつくるう》を再構築し、新たな記憶のイメージを探る。

小田香

ODA Kaori

展示

上映

1987年大阪府生まれ。フィルムメーカー/アーティスト。イメージと音を通して人間の記憶（声）—私たちはどこから来て、どこに向かっているのか—を探究する。2013年、映画監督のタル・ペーラが陣頭指揮する若手映画作家育成プログラム「film.factory」に第1期生として参加し、2016年に同プログラムを修了。ボスニアの炭鉱を主題とした第一長編作品《鉱 ARAGANE》(2015)が山形国際ドキュメンタリー映画祭・アジア千波万波部門にて特別賞を受賞。2019年、メキシコにある水中洞窟を撮影した《セノーテ》が完成。ロッテルダム国際映画祭ブライト・フューチャー部門で上映され各国を巡回。2020年、第1回大島渚賞を受賞。2021年、第71回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。



小田香《Day of the Dead》2021年 制作：市原湖畔美術館

メキシコで撮影した映画《セノーテ》から、小田が初めて制作した映像インスタレーション。メキシコで古くから伝わる「死者の日」、ユカタン半島の景色や人々。カメラの先の世界から、生と死が浮かび上がる。

パンタグラフ

PANTOGRAPH

展示

井上仁行による立体造形・アニメーション制作のアーティストユニット。書籍表紙・広告グラフィック制作やCM・短編アニメーション・ゾートロープ制作など幅広い分野で活動。著書に『パラレルワールド御土産帳』、『メディアワークブック』など。また展覧会やワークショップに向けたアニメーションビューワーアプリ「StroboScope」（iOS）などをリリース中。

数多くの立体造形・アニメーションを制作してきたパンタグラフ。《ストロボの雨を歩く》は、映画と同様の原理で、絵が動いて見えるゾートロープの仕組みをストロボ効果を使い、傘の作品として実現した。



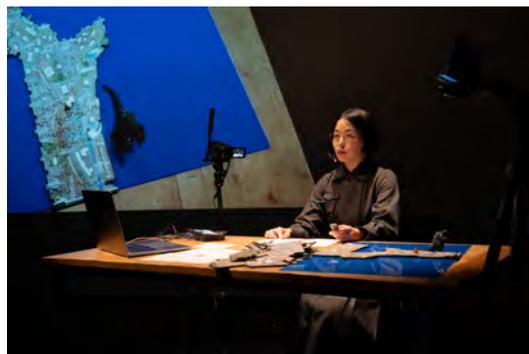
パンタグラフ《ストロボの雨を歩く》2015年
Created for Exhibition "Motion Science" at 21_21 DESIGN SIGHT, 2015

佐藤朋子 SATO Tomoko

展示

1990年長野県生まれ、神奈川県在住。2018年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。レクチャーの形式を用いた「語り」の芸術実践を行っている。

岡本太郎が1957年に著した都市論「オバケ東京」をめぐるリサーチをもとに、シアターコモンズ'21で製作・初演されたレクチャー・パフォーマンスを、恵比寿映像祭のために映像インスタレーション版として再構成する。

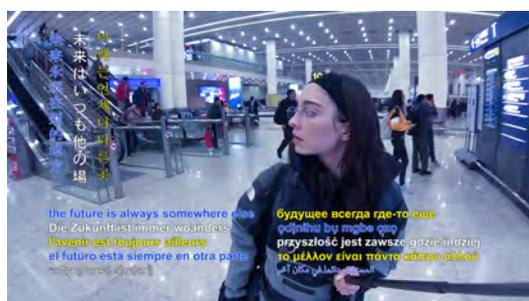


佐藤朋子《オバケ東京のためのインデックス 序章》2021年【参考画像】レクチャーパフォーマンス初演・製作：シアターコモンズ'21 撮影：佐藤駿

アマリア・ウルマン Amalia ULMAN

展示

1989年ブエノスアイレス生まれ、アメリカ在住。セントラル・セント・マーチンズ（ロンドン）卒業。映像や彫刻のみならず、自身のソーシャルメディアでの発信やセルフプロモーション活動も利用して架空の物語を作るなど、多分野にわたる活動を行なっている。これまで、テート・モダン（ロンドン）、ウージェン・ビエンナーレ（中国・烏鎮）などで展示するほか、オンラインパフォーマンス《Excellences & Perfections》がニュー・ミュージアム（アメリカ）と提携するRhizomeのプラットフォーム上にアーカイブされた。



アマリア・ウルマン《Buyer Walker Rover (Yiwu) Aka. There then》2019年 ©2019 Amalia Ulman
Courtesy Amalia Ulman and Wuzhen International Contemporary Art Exhibition.

日用品の巨大な卸売市場があり世界中からバイヤーが集まる中国・義烏を舞台に、ウルマン演じる主人公・アナのセルフイー・ビデオを通して、現代のグローバル消費者社会が描かれていく。2022年1月14日より、初長編監督作品「エルプラネタ」も日本劇場公開予定。[\(synca.jp/elplaneta/\)](http://synca.jp/elplaneta/)

山谷佑介 YAMATANI Yusuke

展示

パフォーマンス

1985年新潟県生まれ。立正大学文学部哲学科卒業後、外苑スタジオに勤務。その後、移住先の長崎で出会った東松照明や無名の写真家との交流を通して写真を学ぶ。近年の展示に個展「KAIKOO」（Yuka Tsuruno Gallery、2021年）、「VOCA 展 2021」（上野の森美術館、2021年）、「BEYOND 2020」（KunstenHuis、アムステルダム/IMA gallery、東京/Galerie Nicolas Deman、パリ、2017年）、個展「Into the Light」（BOOKMARC、東京、2017年）、「KYOTOGRAPHIE」（無名舎、京都、2015年）など。写真集・モノグラフに『ground』（lemon books、2014年）、『RAMA LAMA DING DONG』（私家版、2015年）、『Into the Light』（T&M Projects、2017年）、『Doors』（ギャラリー山谷、2020年）など。



山谷佑介《The doors》2018年
©Yusuke Yamatani, Courtesy of Yuka Tsuruno Gallery

写真家・山谷佑介による、写真撮影とドラムパフォーマンスが融合した《Doors》。ドラムセットの周囲に数台のカメラが設置され、山谷がドラムを叩いた振動をセンサーが感知。強烈なストロボ光と共に作家自身が写し出され、そのイメージがプリンターから出力される。カメラと観客を前に、見る側と見られる側の意識と無意識が行き来する。

1979年香港生まれ。学際的なアーティストであるヤンは、サウンド、パフォーマンス、ビデオ、インスタレーションなどの作品で知られる。2013年に米国プリンストン大学で作曲の博士号を取得して卒業。2017年には第57回ヴェネツィア・ビエンナーレに香港代表として参加した。これまでDe Appel（アムステルダム）、Kunsthalle Düsseldorf（デュッセルドルフ）、Talbot Rice Gallery（エディンバラ）、M+Pavilion（香港）、森美術館（東京）、建仁寺塔頭両足院（京都）などで個展やソロプロジェクトを開催。またソロモン・R・グッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、グロピウス・バウ（ベルリン）、シドニー・ビエンナーレ、上海ビエンナーレ、国立国際美術館（大阪）などでグループ展に参加してきた。2020年、第1回ウリ・シグ賞を受賞。



サムソン・ヤン《The World Falls Apart Into Facts》2019/2020年
（改訂）
Production documentation/ Photo: Lily Yiyi Chan

オペラ「トゥーランドット」でも使用される楽曲「茉莉花」。中国民謡として知られているが、実は西洋に伝来した際に新たな解釈が加えられたものが、今日主流となっている。一方唐楽は、中国からの伝来後、日本でのみその原型が保存され続けている。中国生まれのアイコン的な音楽を通して、文化の伝播や正統性を問う作品。

このほかの出品作品は、第2弾プレスリリース（12月予定）にて発表いたします。

トークやイベントなど多様なプログラム

トーク・セッションやパフォーマンス、イベントなどを開催。展示や上映だけではない様々な形式で、映像文化の楽しみ方や理解を深める場をお届けします。

ラウンジトーク/オンライン (無料)

カジュアルな雰囲気の中で、作家や作品の背景に触れる「ラウンジトーク」をオンラインで開催いたします。映像というメディアについてさらに理解を深め、発見を促す機会を提供します。



三原聡一郎ラウンジトークの様子 第12回恵比寿映像祭（会場：東京都写真美術館）より 撮影：新井孝明

シンポジウム/東京都写真美術館1F ホール (有料)

「展示」「上映」プログラムと連動し、テーマにちなんだ「シンポジウム」を実施し、豊かな議論を喚起していきます。



山谷佑介《The doors》2018年
©Yusuke Yamatani, Courtesy of Yuka Tsuruno Gallery

イベント/1階スタジオ (無料)

1階スタジオでは、「YEBIZO MEETS：教育普及プログラム」を実施します。

プログラムの詳細は決定次第、恵比寿映像祭公式ウェブサイト (www.yebizo.com) で発表いたします。

映像文化の楽しさに出会う！「YEBIZO MEETS」に、教育普及プログラムがお目見え

「YEBIZO MEETS」は、多くの人々が多様な映像表現に触れる「開かれた」機会として、映像文化を紹介・体感するプログラムです。今年度は、「教育普及プログラム」として、鑑賞者と作品の偶然的な出会いをサポートするプログラムや作家らによるワークショップなど、楽しく学べるプログラムを多数ご用意します。また、地域で活躍するアートの担い手たちと行なう「地域連携プログラム」や地域を巡るスタンプラリーなどを通じて、フェスティバルを楽しむきっかけをつくります。

教育普及プログラム



手作りアニメーション体験（おどろき盤制作）の様子より

地域連携プログラム



- ・公益財団法人日仏会館 | TMF日仏メディア交流協会
- ・MA2 Gallery | ArtSticker
- ・MuCuL
- ・工房 親
- ・NADiff a/p/a/r/t
- ・MEM
- ・AL | TRAUMARIS
- ・アートフロントギャラリー
- ・シアターギルド
- ・POETIC SCAPE ほか

プレスリリース／広報用画像／ご取材に関するお問合せ

恵比寿映像祭プレスコンタクト担当（共同ピーアール株式会社）：田中（たなか）、安田（やすだ）
TEL：03-6264-2382／FAX：0120-653-545／E-mail：yebizo2022-pr@kyodo-pr.co.jp
携帯（田中）：080-8866-6183、（安田）：090-7909-5164

※本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しています。

「広報用図版申請フォーム <https://tayori.com/f/yebizo2022/>」より申請をいただくか、

①ご所属 ②貴媒体名 ③掲載予定時期 ④ご希望画像の作家・作品名などを記入のうえ、
上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます

※12月中旬に作家作品の詳細決定後、2次リリースを発表予定です。

詳細は、恵比寿映像祭公式サイト (<http://www.yebizo.com>) でお知らせいたします。

恵比寿映像祭に関するお問合せ

※ 報道・媒体関係者様のお問合せに限らせていただきます。

恵比寿映像祭担当（東京都写真美術館）：柳生（やぎゅう）、池田（いけだ）、平澤（ひらさわ）、鈴木（すずぎ）
〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL：03-3280-0034／FAX：03-3280-0033

※出品作品および出品作家などの内容については、変更する場合があります。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。あらかじめご了承ください。